

静岡イチゴ「きらび香」を用いた
作期拡大・未分化定植本ほ増殖法
マニュアル（病虫害編）

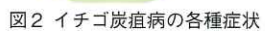
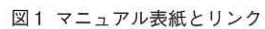
静岡県農林技術研究所では、イチゴ新品種「きらび香」の特性を活かした新作型の開発に取り組んでいます。具体的には、従来の促成栽培よりも作期を延長した「超促成栽培」の確立を目指しています。これにより、反収増加や高単価時期における出荷が可能となり、生産者の収益向上が期待されます。

イチゴ炭疽病は作型や品種にかかわらず大きな被害をもたらし、雨よけ栽培などの対策が普及しているにもかかわらず、依然として多発するケースが絶えないのが現状です。

そこで、当研究所は「きらび香」の超促成栽培を前提にした新たな病害虫防除技術を開発し、マニユアルとして公開しました（図1）。本稿では、マニユアルに示した各技術について概説します。

炭疽病(図2)は主に育苗期に問題となり、潜在感染した親株等を一次伝染源として、雨風や頭上灌水、防除作業等の水しぶきを伴う作業を通じて感染拡大を引き起こします。

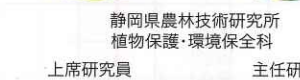
本マニュアルでは、①健全親株の利用、②雨よけ栽培と点滴灌水の導入、③適切な薬剤防除（薬剤の選択・散布前の罹病株除去の徹底）、④早期定植本ば増殖法の活用について説明しています。ここでは、③、④の



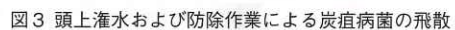
内容について簡単に紹介します。

県内で収集した炭疽病菌について調査すると、単作用点殺菌剤（FRACコードが数字のみのもの）では薬剤に対する感受性低下により、多くの薬剤で十分な防除効果が得られない事例が認められました。

一方、多作用点殺菌剤（FRACコードがMで始まるもの）では、多くの薬剤で高い防除効果が認められました。

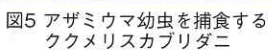


中野 亮平 片山 紳司



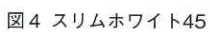
また、薬剤散布作業の噴霧方向や圧力によっては、頭上灌水と同等以上に炭疽病菌の胞子を飛散することが示されました(図3)。

除技術と組み合わせ、防除体系を構築しました。マニュアルでは、その防除体系の詳細と実証事例を紹介しています。



本稿で紹介した各技術の詳細について知りたい場合は、マニュアルをご参照ください。今回の、マニュアル公開に加え、植物保護・環境保全科では、より効果的・安定的な防除対策の確立を目指して、今後もイチゴの病害虫に関する研究開発を継続します。

「ハウス内における増殖の阻止」については、最も防除効果の高い天敵製剤として「ククメリスカブリダニ」を選定しました(図5)。本天敵の最大の特徴は、1頭あたりの価



ウマ類の侵入とハウス内気温の上昇を抑制します。本資材の効果を従来の0.8mm目合防虫ネットと比較したところ、アザミウマ類侵入量は70%以上削減され、ハウス内の気温に影響はありませんでした。

「ハウス内への侵入量の低減」については、アザミウマ類侵入抑制効果が極めて高い防虫ネット資材「スリムホワイト45（日本ワイドクロス(株)）」を選定しました（図4）。本資材には光反射シートが織り込まれており、この光反射効果によりアザミ

られました。

これらの技術を既存のハダニ類防

三 虫害対策 アザミウマ類、ハダニ類

イチゴ栽培における最重要害虫はアザミウマ類とハダニ類です。とりわけ暖候期の栽培期間を延長した場合は、アザミウマ類による被